

御霊をあがめて歩む

―御父・御子と共に―

(ガラテヤ5・16)

今年の教会標語の「御霊をあがめて歩む―御父・御子と共に―」の根底にありますのは、ニカイア信条(ニカイア・コンスタンティノポリス信条)第三項の聖霊に関することばです。〈また聖霊を信じます。聖霊は主、いのちの与え主であり、父(と子)から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。そして預言者によって語られました。〉
ここから採りました。

一、御霊は聖霊であり、神である

ガラテヤ書5章16節を見てまいりませう。〈私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。〉とあります。ここに書かれている〈御霊〉は、原文には「霊(プニユーマ)」ということばが記されています。ですから「霊」が、人間の霊なのか、悪霊なのか、神の霊なのかは、前後関係から判断するわけです。聖書において、「霊」と書かれていることばが明らかに神の霊、すなわち「御霊」を指している場合、神の霊とは一体何なのかを受け止めることが重要です。すなわち神の霊を、神御自身と認めるかどうかです。旧約のヨエル書に〈？

28〜29その後、わたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、老人は夢を見、青年は幻を見る。その日わたしは、男奴隷にも女奴隷にも、わたしの霊を注ぐ。〉とあります。これを見て、「霊」というのは神御自身というよりも、神の働きのことを指しており、水のように注がれる神の働きのことである」と受け取ってしまいますと、キリスト教会が信じてきた内容から外れてしまうこととなります。いわゆる、異端になってしまいます。神の霊は御霊とも呼ばれ、御霊は神であり、聖霊とも呼ばれます。そういうわけで、御霊は、すなわち聖霊は、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられるお方です。

二、御霊をあがめて歩む

「御霊をあがめて歩む」とは、今年の標語であります。が、「あがめる」とは、どっぴり意味なんでしょうか。聖書で、一般的に使われている「あがめる」ということばは、「栄光(ドクサ)」ということばの動詞形です。すなわち「栄光を帰す」という意味です。だれに、でしょうか。神にです。そういうわけで「御霊をあがめて歩む」とは、「御霊に栄光を帰して歩む」、すなわち「神に栄光を帰して歩む」という意味です。私たちが、私たちに注がれている御霊なる神に、栄光を帰しているでしょ

うか。「聖霊さま、神さま。きょうも私を支えてくださってありがとうございます。すべては聖霊さまによって助けられた結果です」と、感謝しているでしょうか。聖霊なる神に感謝するとき、父なる神、御子イエス・キリストに感謝していることとなります。なぜなら神は、父・子・聖霊なるお方だからです。

先ほどは、ヨエル書の聖句を引用しましたが、預言者ヨエルが語った「わたしの霊」とは「聖霊」です。使徒の働き2章において、神の霊とは聖霊であると語られています。ですから、旧約における「神の霊」が、新約における「聖霊」に相当するわけです。ただし、旧約においてはキリストが隠されていましたから、神が父・子・聖霊なる方であるとの認識はないわけです。したがって、旧約には聖霊なる言葉がありません。神は「すべての人にわたしの霊を注ぐ」とおっしゃり、その預言はイエスさまが天に挙げられた後に、実現しました。そういうわけで、かの紀元30年。ペンテコステの日以来、聖霊が注がれています。聖霊は神ですから、聖霊を思わない、そして聖霊に呼びかけないのは不自然なことではないでしょうか。

三、霊の現象を吟味する

聖霊なる神は語りかけられます。もちろん、みことばの解き明かしと共に、聖霊は働かれます。ですが、現実

に生きている中で、大きな慰め、支えを必要とする出来事が起きてまいります。その時に、大きな力が神からもたらされま

す。それは、聖霊の働きです。あるいは人生において進むべき道に迷い、導きを必要とする出来事が起きてまいります。その時、ヘイザヤ30・21あなたが右に行くにも左に行くにも、うしろから「これが道だ。これに歩め」と言つことばを、あなたの耳は聞く。〉ということが実際に起こるなら、どんなにか大きな励ましになることでしょうか。聖霊なる神は語られ、促されます。

では、聖霊の働きに心を開くようになることにより生まれる混乱に対しては、どのように対処したら良いでしょうか。実は、霊的な現象は、どこからどこまでが聖霊の働きであって、どこからどこまでがその人自身の霊の働きであるかの線引きは、むずかしいと思われま

す。必ずと言って良いほど、行き過ぎや、過ちは起こります。ですが、その分、神の働きを身近で味わうことにな

るのも事実です。警戒して霊の働きを認めないか、それとも聖霊なる神の働きに心を開いて歩むか。それを決めなければなりません。私は、極端なものは避けつつも、聖霊なる神の働きをたいせつにして行きたいと願つて